
魔人先生（仮）

どぶろく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔人先生（仮）

【Nコード】

N4763N

【作者名】

どぶろく

【あらすじ】

ただひたすらに力を追い求めた男は、己の半身に敗北し、闇へと消える筈だった。しかし運命の悪戯か、辿り着いたのは自らが選んだ場所ではなかった。

プロローグ

「・・・お前は行け。魔界に飲み込まれたくはあるまい。」

己の半身との壮絶な死闘の果て、敗れた男はその刃を、半身たる赤い男の首筋に突き付ける。

「俺はここでいい。親父の故郷のこの場所が・・・。」

その言葉を最後に、男は深淵にその身を躍らせる。

半身が男を救わんと伸ばした手を、刃を以て拒絶して。

そして男は、人間界と魔界の境界の歪みに飲まれて姿を消した。

目を覚ました男の周りに広がるのは、澄んだ空気と瑞々しい森。

「・・・何だ、ここは？人間界か？いや、それにしては」

大気中の魔力が異常なほどに濃く、それでいて魔界のような禍々しさが無い。

「・・・ウグツ!？」

未だ治りきっていない傷が疼いた。

「・・・クソッ。」

混乱する頭に更に苛立ちが混じった。

しかし彼は、鋼の如き冷たい意志でそれらを無理やり押し込める。

「・・・ここが何処か分からん以上、情報を集めるのが先決か。」

幾分か冷静さを取り戻した男は、次いで体内に魔力を巡らしていく。すると、男の傷が人間ではあり得ない速度で治癒していった。だが、

「・・・傷の治りが早い?」

それはどうやら男にとっても予想外だったようだ。

しばしの間彼は、何者にも、その内に秘めるものを読み取らせない無表情でその場に佇んでいたが、やがて何かに気付いたようにその足を進めた。

その先には、灯に照らされた中世を思わせる街並みが朧げながら確かに存在していた。

ブローグ（後書き）

最近、DMCとリリカルなのはのクロス作品が増えてきたようなので、私はあえて別作品でやらせていただこうと思いました。

第1話 疑問（前書き）

ありがちな展開を避けようと四苦八苦して、結局無理でした（笑）

第1話 疑問

「・・・この文字は確か、平仮名と漢字だったか？ということとは、ここは日本か。」

レンガ造りの大きなアーチに取り付けられた、部活動などを応援する垂れ幕を見ながら、蒼いコートを羽織った銀髪の男　　バー
ジルは一人呟く。

「人間界ではあるようだが、ある意味では安心できんな。」

何しろこの魔力の密度だ。

このような魔力の壺ともいえる霊地では、大概何かしらの『魔』に類するモノがあるものだ。

特に、『悪魔』はその力を増すだろう。

「ところで」

バージルの周囲の空間に凄まじいまでの殺気が満ちた。

「俺に何の用だ？」

背後、左右に伸びる道路の中央に並ぶ街路樹、その左方の一本を冷徹な眼差しが射抜く。

その問いへの返答と言わんばかりに、冷たい夜気を銃弾が斬り裂いた。

「 フン。」

しかしバージルは、不意打ちに近いその一撃を舞うように躲した。
その右手が、左手に持つ日本刀 閻魔刀やまこの柄に添えられる。

チン、という鐸鳴りがただ一つ響いた。

数瞬の静寂。

そして、並び立つ街路樹の、ただ一本だけが斜めにズレた。

「なっ!？」

自重で倒壊した樹の影から姿を現した黒人の男が、驚愕の声を漏らす。

「・・・貴様か。」

黒人の男の全身を、バージルの放つ圧倒的な殺気が縛り付けた。

男 ガンドルフィーニは、本来今日は非番の日だった。

寮に帰る途中で、学園長から侵入者が現れたという電話に出たところで、遠目に日本刀を携えた蒼いコートの男が見えた。

今まで見たことのないその男が侵入者だと判断したガンドルフィーニは、その旨を学園長に伝え、銃を構えて男を追跡したのだった。

そして、

「俺に何の用だ？」

その言葉と共に放たれた殺気の強さに、ガンドルフィーニは思わず引き金を引いてしまっていた。

その直後に、身を隠していた樹が斜めにズレて倒壊した。

「なっ!？」

漏らした驚愕は二重の意味を持つ。

視界の良くない夜中に、不意打ちに近い銃弾を躲したことについてそして、『魔力』も『気』もなかったのに樹が前触れもなく切断されたことについてだ。

「・・・貴様か。」

その殺気は、彼が今まで経験したものを軽く凌駕していた。こんな明確に『殺す』という意志を込めた殺気は、学園トップクラスの實力のタカミチ・T・高畑ですら持ち得ないだろう。

そう、それこそあの忌々しい『闇の福音』でもなければ。

それは彼にとって最悪に等しい。

『正義の魔法使い』であることに強い執着を持つガンドルフィーニは、闇に属する者を容認しない。

彼にとって闇はすべて悪であり、滅するべき敵なのだ。

そして今、彼はそんな『悪』かも知れぬ存在を討たねばならないという義務感から、恐怖を押し殺して侵入者であるバージルに警告を発する。

「大人しくしろ侵入者！！降参すればよし、しないのなら強制的に排除させてもらう！！」

「・・・フン。そんな警告は銃を撃つ前にするんだな。そもそも何時から日本では銃を使えるようになった？」

そう言つてバージルは、閻魔刀に手を掛けた。

ある意味においてバージルの言葉はすべて正論であり、ガンドルフィーニは僅かに顔を顰めたが、義務感に囚われてしまった彼もまた、バージルと同じように自分の得物を構えた。

最早和解はありえない。互いに攻撃を加えてしまっているのだから。

両者の間を吹き抜けた風が止むと同時、バージルは一瞬にしてガンドルフィーニの懷に飛び込んでいた。

「ッ!？」

これは瞬動ではない!？

驚いている暇はなかった。

バージルの刀が、その鞘から鈍色の輝きを覗かせていた。

「くっ!」

背筋に走る悪寒のままに、ガンドルフィーニは後方へ向けて我武者羅に跳んだ。

瞬間、ガンドルフィーニの前髪が幾本か夜に溶けた。

「・・・ほう。」

バージルが感嘆の声を発した。

「首を落とすつもりだったが、どうやらただの人間ではないらしい。」

ガンドルフィーニは肉食獣に睨まれたかのような錯覚を覚え、慌てて銃をバージルに向けた。

しかし、既にそこに彼の姿はない。

「だが、ここまでだ。」

背後から首筋に冷たい刃が突き付けられていた。

「（馬鹿な・・・。こんな簡単に私が背後を取られるだ!?!）」

戦慄するガンドルフイーニを余所に、バージルはただ淡々と己の求めるものを告げる。

「いくつか質問に応えてもらおうか。」

「断る！！侵入者風情に応えてやることなど何もない！！」

その言葉に苛立ったのか、僅かに皮膚に刃がめり込んだ。

「貴様の事情などどうでもいい。命が惜しくば、さつさと・・・チイツー！！」

バージルは自分に迫る脅威に気付き、後ろへと跳躍した。直後、バージルのいた空間を鋭い衝撃波が駆け抜けた。

「遅れてすみません！」

駆けつけてくる眼鏡の男を見たバージルは、その実力が並々ならぬものであることを見抜いた。

今の衝撃波が何なのか気にはなるが、強者との戦いは間違いなく自分を強くしてくれる。

そう思ったバージルの口元につつすらと笑みが浮かぶ。

「た、助かりました高畑先生。」

「ご無事で何よりです。・・・彼が？」

「はい。ですが、気を付けて下さい。彼のスピードは並大抵のものではない。」

頷き、バージルに向き直った高畑から、強さだけならバージルと同等の殺気が放たれる。

「君は何が目的で、この麻帆良学園に忍び込んだんだい？」

「・・・？　ここは学園なのか？」

訝しげに問うバージルの様子に、高畑もまた同じような表情になった。

「君はここが麻帆良だと分かって、忍び込んだんじゃないのかい？」

「・・・知らないな。俺は、気が付いたときには向こうの森にいた。」

その言葉にガンドルフィーニが、言葉を荒げた。

「そんな言葉信じられるか！大体、私を殺そうとしたではないか！」

「馬鹿か貴様。先に銃を、しかも無警告で撃ってきたのは貴様だ。俺はただ、自己防衛をしたに過ぎん。」

「し、しかし・・・。。。」

それから先は言葉が続かなかった。

もし命中していれば、死んでいたかもしれないのだ。

『殺気に驚いて』などとは、言い訳にもならないだろう。

「・・・それじゃ、君はこの学園のことは何も知らないんだね？」

「ああ。」

「ということとは、当然害意もないと？」

「ああ。そもそも、初めて知ったモノにどうして害意など抱ける？」

ふうむ、と高畑は顎に手を当ててしばし思索し、

「それなら、少し話を聞かせてくれないか？こうして忍び込んできた以上、事情を聴かないという訳にもいかないんでね。」

「た、高畑先生！？この男の力は危険です！それに、信用できない！」

ガンドルフィーニが慌てて高畑の提案に異議を唱えた。

だが、高畑は確信があるかのように彼を窘めた。

「僕は大丈夫だと思いますよ。彼が始めからこの学園に敵対するつもりなら、言葉を交わしたりしないでさっさと僕たちを殺そうとしているでしょう。そして、今この瞬間もね……。」

「で、ですが……。」

「話は済んだか？」

待ちかねたかのようにバージルが口を挟む。

「無視されるというのは気に入らんな。俺も貴様らには聞いたことが色々ある。早くしてもらおうか。」

「おっと、ごめんごめん。それじゃ、学園長の所に案内するからつ

い
て
来
て
く
れ。
」

第2話 会合（前書き）

現時点での彼らの会話は、英語で行われているものとお考え下さい。

第2話 会合

携帯電話で何処かに連絡を取る高畑。

その後ろを閻魔刀に手を掛けたバージルがついて歩く。

さらにその後ろを、拳銃とナイフを構えたガンドルフィーニが続く。

ただ歩いているだけなのに、そこに漂う空気は最早戦場のソレと変わりがなかった。

一般人が傍にいれば、間違いなく逃げだすだろう。

やがて一行は、しっかりとした造りの扉の前に辿り着いた。

「さて、バージル君。ここが学園長室だ。詳しいことはここで話そう。」

厳かな雰囲気を纏った音と共に開かれた扉をくぐり、その『学園長』の姿を認めたバージルは、次の瞬間にはその刃を抜き放っていた。

その突然の行動に高畑は慌て、ガンドルフィーニは引き金に掛ける指に力を込めた。

「ちょ、ちょっと待ってくれバージル君！」

「黙れ高畑。人間ではないモノが学園の長だとは聞いていないぞ。」

唸るようなバージルの言葉に、当の学園長が反論する。

「ワ、ワシャ人間じゃあああああああああ！！」

そんな必死な学園長を冷たく突き放すバージル。

「冗談はその頭だけにしておくんだな。

何処にそんな長い頭と耳をした人間がいる？『悪魔』だと言われた方がしっくりくる。」

よりによって、『悪魔』と同列の扱いをされた学園長のテンションは一気に最低になった。

さめざめとした学園長の嗚咽のようなモノが広い部屋に染みる。

「き、貴様！学園長に向かってなんて事を・・・ッ！」

「・・・高畑。こいつらでは話にならん。貴様が話を進める。」

高畑はそんな彼らの様子に苦笑して、

「分かった。でも訂正させて欲しい。学園長は間違いなく人間だよ。」

それからすぐに立ち直った学園長と高畑、バージルはソファに腰掛

けた。

バージルのすぐ後ろに、ガンドルフィーニが立つ。その手には当然の如く得物があつた。

バージルも閻魔刀に手を掛けることを忘れてはいない。

「さて、と……。」

高畑が一番に口を開く。

「君は気付いたときにはここにいたと言ったけど、『転移魔法』を使った、あるいは巻き込まれたりしたのかい？」

この時世に刀を携えていたことと、その刀から魔力が感じ取れたことから、彼が『裏』の人間だと思つての発言だったのだが、

「……『魔法』、だと？」

何を言っているのか分からないといった様子のバージルに、思わず学園長と高畑は顔を見合わせた。

「まさか……『魔法』を知らない？」

「いや、知つてはいる。だが、俺の知る『魔法』は『悪魔』が使う光弾ぐらいだ。」

「……『悪魔』は知っているのに、その程度の『魔法』しか知らんだと！？馬鹿も休み休み言え！！」

ガンドルフィーニが糾弾するが、学園長からの無言の圧力を受けて口を噤んだ。

「・・・続けようかの。ではお主は、『魔法使い』の存在も知らんのかの？」

「知らんな。俺の知る『魔』の法を操る存在は悪魔だけだ。・・・どうやら貴様らは『魔法』、そして『魔法使い』とやらに詳しいらしいな。面倒だ。まとめて話せ。」

「・・・成程、な。（これはいよいよキナ臭くなってきたな。）」

曰く、一般人には秘匿されている。

曰く、大きな区分として、西洋魔術と東洋呪術があり、この麻帆良は前者の領域である。

曰く、立派な魔法使いあるいは、偉大な魔法使いと呼ばれる『マギステル・マギ』は、陰ながら人助けなどを行う、魔法使いの名誉とも言える職である。

etc, etc, etc.....

どれもこれもバージルは聞いたことがなかった。

「・・・悪魔は存在するのか？」

「・・・む？お主、さつきからずっと『悪魔』と言っておったじゃろ？」

何を今更、といった様子の学園長と先程のガンドルフィー二の

「・・・『悪魔』は知っているのに、その程度の『魔法』しか知らんだと！？馬鹿も休み休み言え！！」

というセリフから考えると、悪魔は存在するようだ。

というより、今の質問といい初対面の人間に『悪魔』と言ったことといい、どうやら自分は自覚していないだけであまり冷静ではなかったらしい。

バージルは、自分の不甲斐なさに心の中で怒りつつ一番気になる質問をした。

「・・・『スパード』、『ムンドウス』、『テメンニグル』、『フオルトウナ島』、『魔剣教団』。これらに心当たりはあるか？」

学園側の三人は互いに目を合わせるが、その全員が首を横に振って見せた。

その答えに、バージルの中に拡がりつつあった『可能性』がその色を濃くした。

「（・・・いや、決め付けるのは早すぎる。たまたま知らなかった
だけでも知れん。・・・ここは互いの情報をすべて照らし合わせる
べきか。）」

「・・・まさかここまでとはな。」

「これは・・・どういうことかのう？」

大まかな歴史は殆ど違いがないようだった。

だが、年代が違う。都市の名前が違う。地形が違う。

それ以外にも、細かい差異は数を挙げればキリがなかった。

否定したかった。

だが、『魔界』という実例がある以上、その『可能性』を認めるし
かないようだった。

「・・・どうやら俺は、こことは違う世界から来たらしい。」

「「なっ!？」」

高畑とガンドルフィーニの驚愕の声が重なった。

「・・・貴様はあまり驚いていないようだな。」

「いや、驚いてはおるぞい。じゃが、こちらにも『魔法世界』という異世界がある以上、その他の世界がないということはないじやろうて。」

「が、学園長！！この男の言葉を信じると言うのですか！？」

「ここまでの差異があるというのに、お主は信じられんのか？そも、この手の嘘が彼から出るとは思えん。それに、仮にもワシはこの学園の長じゃ。人を見る眼くらいはあるつもりじゃよ。」

そう言われては引き下がるしかなかった。

「・・・ということは、当然お主には行く場所がないということになるのう。」

「ああ。不本意だが、そうなるな。」

「それではバージル君。この学園で働いてみんか？」

思わず学園長の顔を見るバージル。

出会って間もない人物に、仕事をさせるというこの老人の考えを疑ったのだ。

「（・・・いや、むしろ逆だな。）成程、監視という訳か。」

「・・・気を悪くしないでくれんかの？学園の長である以上、ワシはこの学園を守る義務がある。」

「そんなことはない。むしろ感心しているぐらいだ。世界が違うとはいえ、日本人は平和ボケした人種だという認識は改める必要がありそうだな。」

「・・・いいだろう。貴様らの扱う『魔法』にも興味が沸いた。」

「ふむ。それではよろしく頼もうかのう。詳しい仕事は明日通達しよう。」

高畑君。お主の部屋に彼を今晚泊めてやってはくれんか？」

この日、『伝説の魔剣士』の血族が異世界に降り立った。

第2話 会合（後書き）

亀更新ですが、応援よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4763n/>

魔人先生（仮）

2010年11月18日02時29分発行